

環境庁委託

第2回自然環境保全基礎調査

# 植生調査報告書

1979

東京都



# 目 次

1. 調 査 概 要	1
2. 調 査 対 象 地 域 図	2
3. 凡 例 解 説	3
4. 植 生 調 査 表	27
5. 資 料 リ ス ト	72
6. 調 査 担 当 者 名 簿	72
7. 写 真	73



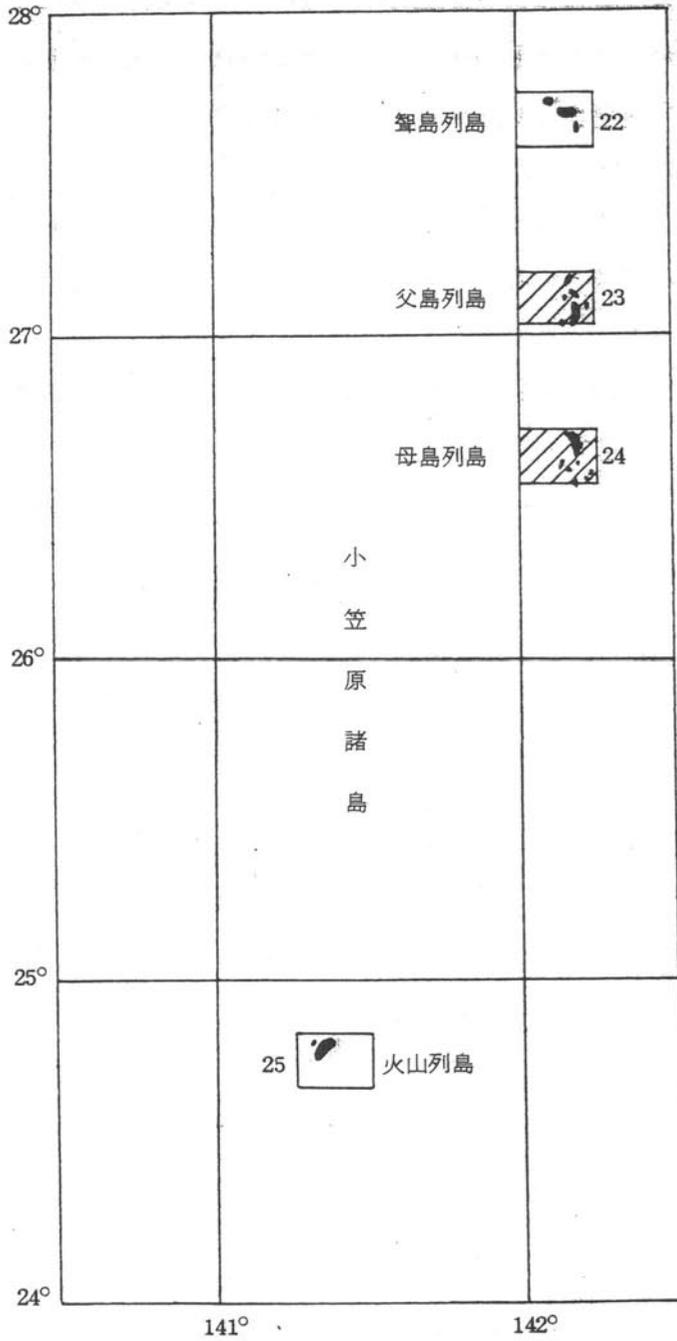
# 1 調 査 概 要

調査地域は小笠原諸島（東京都小笠原村）の主要部である父島列島（父島、兄島、弟島およびそれらの小属島）と母島列島（母島、向島、平島、姉島、妹島、姪島およびそれらの小属島）の全諸島である。

調査は1979年4月～12月に実施した。

次項の凡例（植生単位）解説は、ほとんどすべてこの調査結果とわれわれの手持ち資料によったものであり、ごく一部だけ巻末にあげた文献資料を利用して頂いた。群集（落）組成表も作成されているが、本報告書には、各植生単位の代表的な植分の植生調査表をそれぞれについて1枚づゝ付してある。

## 2 調査対象地域図



〔数字は地形図番号、文字は地形図名〕  
 斜線部は植生図化地域

### 3 凡 例 解 説

今回の調査により、父島列島と母島列島から、合わせて54の植生単位(19群集、29群落、6林種)が識別されたが、1:50,000の本植生図には、これらを以下の39凡例にまとめて示した。

#### I 自然植生

##### 1 ムニンヒメツバキーコブガシ群集(大場・菅原1977)

[常緑広葉高木林または亜高木林]

ムニンヒメツバキーコブガシ群集は、コブガシ、ナガバシロダモ、キンモウイノデを標徴種、識別種とした群集で、父島、兄島、弟島など父島列島のみに分布する。この群集は、後述のムニンヒメツバキーシマオオタニワタリ群集とともに、ムニンヒメツバキとオオシラタマカズラを標徴種としたムニンヒメツバキ上群集にまとめられ、そのムニンヒメツバキーシマオオタニワタリ群集とはシロテツ、シマモクセイの出現によって識別される。

群落高は3~12mほどで低木林から高木林までであるが、亜高木林が主体をなし、その林冠はムニンヒメツバキが優占する。階層構造はあまり明瞭ではないが、3~4層から成る。

種類組成については1林分当たり平均して30種弱で、一般に貧弱な組成をもつ小笠原諸島の自然林群落の中では最も豊富である。林冠にはムニンヒメツバキが優占するほか、コブガシ、テリハコブガシ、シャリンバイ、ムニンネズミモチ、マルバヤブニッケイなどが高常在度で出現する。また部分的には、モクタチバナやシマイスノキがそれぞれ優占しているところもある。林床は一般にきわめて貧弱で、キンモウイノデ、テイカカズラなど以外は常在性のものはほとんどない。しかし林分によっては、タマシダやヒゲスゲがかなり優勢である。

ムニンヒメツバキーコブガシ群集は、山地の主として斜面中部以下に成立しているが、山地上平坦地(例えば父島南部天之浦付近の台地状地)や斜面上部で

も、土壌の深い所にはしばしばみられる。しかし、これらの立地はリュウキュウマツの植林地におき換えられている所が多く、残存林分はこまぎれ状である。部分的には、例えば父島の南半部、兄島の沢筋、弟島の中央凹地などには、比較的まとまった林分がある。小属島ではほとんどみられない。

なお、この群集は本来的には自然植生であるが、過去に軍や家庭用あるいは製糖用の薪炭林として利用されていたようで、萌芽林の林相を示している林分も多い。さらにまた、この群集にはオガサワラビロウの侵入することが多く、そのような林分は常緑広葉樹林の相観を失ない、特異なビロウ林の相観を呈している。

## 2 ムニンヒメツバキ—シマオオタニワタリ群集(大場・菅原1977)

[常緑広葉高木林または亜高木林]

この群集は母島のムニンヒメツバキ林である。上述のように、この群集はムニンヒメツバキ—コブガシ群集(凡例1)とともに、ムニンヒメツバキ上群集に入れられるが、この群集は独立した種群を欠き、この上群集の典型部としての性格をもつものである。上述のムニンヒメツバキ—コブガシ群集に対しては、シマオオタニワタリ、オオバシロテツ、ハチジョウシダが識別種となる。

群落高は6 m以上で、よく発達した林分では15 mに達するが、林分によっては低い萌芽林となっており、またオガサワラビロウあるいは琉球から移入されたアカギが侵入して相観が変わっている林分もある。

林冠にはムニンヒメツバキが優占し、このほかモクダチバナ、シャリンバイも優勢である。また被度は低いがテリハコブガシ、ムニンネズミモチ、シマギョクシンカ、トキワイヌビワなどの常在度が高い。林床にはシマオオタニワタリが生育しているのが特徴的である。このほかタマシダ、ケホシダなどがしばしば優占する。

ムニンヒメツバキ—シマオオタニワタリ群集は母島のみにもみられ、その中部の山地の西斜面や北部の西台を除く山地一帯に広く分布しており、そ

のまとまりもよい。一部の林分は海拔高約300m前後の雲霧帯下部まで分布し、さらに上部で雲霧帯を中心に分布するモクタチバナセキモンノキ群集と接している。地形的には緩斜面を主とし、適潤地からやや湿性なところを主な成立立地としている。

### 3 シマホルトノキウドノキ群集(大場・菅原1977)

〔常緑広葉高木林〕

シマホルトノキウドノキ群集は、小笠原諸島の森林群落中最も良く発達した群落で、母島中部の桑ノ木山と石門の土壤の深い緩斜面とか平坦地にできた凹地などにみられる。この桑ノ木山と石門一帯の樹林は戦前より国有林の学術参考保護林として保護されてきたもので、ともに保護状況はよい。

この群集はシマホルトノキとウドノキによって標徴、識別される。発達した林分では群落高が23mにおよび、直径1mにも達するウドノキやシマホルトノキの巨木も少なくない。これらはしばしば板根を有している。

階層は通常4層から成る。高木層は主にウドノキ、シマホルトノキ、モクタチバナなどから構成され、時にオガサワラグワも混じえる。また亜高木層～低木層は、モクタチバナ、テリハコブガシ、オオバシロテツ、アカテツなどから成る。とくにモクタチバナの優占度はきわめて高い。これらの樹木にはシマオオタニワタリの着生がしばしばみとめられる。

林床は、桑ノ木山の大半および石門の凹地の林分ではムニンヘッカシダが優占し、また林分によってオオイワヒトデの優占するところもある。しかし石門のこの群集の林分の多くでは林床は貧弱である。

シマホルトノキウドノキ群集は、上述のように、まとまって残存しているのは母島の桑ノ木山と石門だけであるが、母島北部の庚申塚付近の沢筋にもその断片が見出され、かつては母島の適潤な立地を広く被っていたものと思われる。それだけに、現在の2ヶ所の良林分は今後とも保護を加えて残しておきたい林である。